

国立台湾大学蔵本 『巖松万倍緑』

鳥居フミ子

国立台湾大学研究図書館に絵入り狂言本『巖松万倍緑』がある。
虫喰いもなく、保存のよい美本である。

この狂言本については『国書総目録』に記載されておらず、
「上方狂言本正徳以降書目」（鳥越文蔵氏『ビブリア』十六号所収）にも掲げられていない。しかし、歌舞伎評判記『役者三幅対』（享保三年正月刊）『役者職敵』（同年同月刊）に挿絵入りで紹介されているので、古くからこの狂言の存在は知られていた。即ち、この狂言は題名と役柄の一部が分るだけで、全体の構成が知られていないものの一つであった。こゝに台大本『巖松万倍緑』の全貌を紹介し、歌舞伎研究に資するものである。

なお、本狂言本については『歌舞伎評判記集成』別巻月報（昭和五十二年十二月）で簡単な紹介をしたことがある。

いはほのまつまんばいのみどり
巖松万倍緑

かほみせおどり哥いとづくし

みわの山ぢのもすそのいとは、すぎしむかしの、かたいたなれど今もいろ引三すじのいとよ。詞男まつよの、いとぐるまいかのいと程のぼしておいて、しめつゆるめつしたたんたん／＼たきのいとしたたんたん／＼たきの糸、こちのふかさのそこしらいとで、人の心のあさ糸なればかいもなく、そめてくやしの／＼なま中に／＼、あへばかわいといやわた糸の、いと／＼しよのいとしよ、の／＼へそめてくやしの／＼なま中に／＼、あへばかわひといやわた糸の、いと／＼しよのいとしよの／＼、いとしけりやこそ、雪のよも霜のよも、きてはねまきのあやはからいと

上 御屋かたのぎおん林ばやし

中 御やさしのいせみやげ

下 御うれしのよめ入姿

一あまのはし将げん

一むすめゆき姫

一こし花川いくの

一同 山本つる太郎

一おつぼね

一かんざき兵ご

一おく家老忠太左衛門

一はまだ十蔵

一かぢ川四五右衛門

一いもとごけおくめ

一弟万之丞

一水ちや屋おとら

一同じくおさん

一なにはづはるの丞

きり山惣七

大夫山下かめの丞

一もとあさおきよの

一同 浅尾小源太

はぎの弥七

敵役平岡有右衛門

同きく田善右衛門

大谷彦三郎

吉岡三郎介

大夫山本かもん

若衆はな山長之介

花川いせの

きく川京之介

立役山中猶十郎

一小性源吉

一かまど山民之丞

一女房おきさ

一同じく母

一やねふき源三

一女房およつ

一さくはん源三

一ゆきへおくおちよ

一同いもとお京

一同いもとお吉

一おちのおのへ小紫

一まつ 山本辰太郎

一金右衛門藤田九八

一ぞうり取平介

一玉ぐしかず右衛門

一あまのはしゆきへの丞

一狂言作者

山本小もんど

立役音羽次郎三郎

きく川つね次郎

くはしや為川小兵衛

立役百人首源三郎

若女上村きよ三郎

道外玉川源三郎

大夫上りきよ崎半太夫

花垣松之介

尾上きく三郎

一とみ花垣ゑもん

一しけ 上村吉三郎

一馬かた福山又五郎

立役山下宗十郎

実敵三お木義左衛門

立役小佐川十右衛門

さど嶋三郎左衛門

(三十一オ)

上

いわおのまつまんばいのみどりなには男お情の笠
巖松万倍緑

あづま女お情の恵

顔見世大当り

みのゝ国あまの橋将げん殿みだいの弟・かんざき兵で・侍引ぐし来れば、おくがらう忠太左衛門御むかいに出。「なぜおのり物にめしませぬ。」「されば身はらうにんで六でう敷のあさましいくらしでゐた。此度あねじや人より参れと。小袖大小迄下された。めうがないと思ひのり物にはのらぬ。身が来るを家中で取さたはなんと云ぞ。」忠太聞。「尤大殿の弟でにゆきへ様と申が有しが、やうす有て国にござらぬ。ゆき姫様とてお姫へむこ様御入のはづなれ共。いまだみへず。所へおまへの御入めでたいと申ます。」「おゝとかくは忠太其方を頼申。」「何が扱先御入なされませ」と。ともないやしきへ入にける。

おとらおさんは前だれ姿。水茶屋の女に成。所へこしもとはさん箱持。女房立六尺姿。姫君のおのり物かき。つぼねつりひげかけて供やつこ。「なんと皆の衆。お姫様は大殿様が都へお上りの時。まうけ給ひしゆへ。氏神は京のぎをん様。それでやしきの内にぎおん様をうつし。石の鳥井二間茶屋のけしき。朔日廿八日御さんけいじや。むかふからしやれたふうな女がくる。」姫のり物より出。「あれはおくめじや。是はかはった出立じや。」「おつばね聞へませぬ。かやうのもよほしを。わしにはなぜしらさんせぬ。

それでわしが(三一ウ)思ひ付て。くろ小袖のかくし紋。ごけふうのぎをん参りでござんす。」おとらみて「ようござんす。おまへはおつれあい柳川千左衛門様五十日いぜんにおはてなされ。お心うきもなされまいと有て。御しらせなされなんだ。」ゆき姫聞「其通じや。扱もよいふうじや。おれも言名付の殿様が御入なきゆへかみを切てゐる。殿のお入なさるゝとだて姿せねばならぬ。そなたのふうおしへてたも。」つぼねおしのけ。「あのいたづらふう御無用じや。」おくめはつぼねを引すへ。「わしがいたづらをきゝませふ。」「さればこなたはおつと千左衛門殿にわかれ。七日もたゝぬ内から家中の若男。中げん男迄文付て。恋をかなへ不義いたづらさつしやるでないか。」おくめ聞。「男が有は不義。わしや後家の徳に。すきな男にいまする」と云所へ。おくめが兄四五右衛門。弟万之丞。はまだ十歳もろ共来り。「大殿様の御意で。おくめに申義有て参りました。お姫様にはおくへ御入なされませ」と云ば。つぼねお供し皆をくへ入。おくめは「何事でござんす。」「めでたい事じやうら門へ参れ」とつれて行。

なにはづはるの丞は当世のだて姿。羽織大小雪がさ。小性源吉侍共引つれ野道へ来る。むかふより人ごゑすればかしこへしのびゐる。所へ四五右衛門兄弟おくめをつれ。十歳諸共来り。「やいくめ其方千左衛門相はてられ。忌中の内いたづらをなす。親兄弟

のつらよぐす。大殿様へ申上手打にせんと申たれば、女の事じや
ついほうと仰出された有がたふ思へ。」弟万之丞は「是あね様、

云はけ有ば十蔵殿へ仰られませ。」(四二才)

挿絵 第一 図 (四二ウ)

挿絵 第二 図 (五三才)

おくめさしうつふきへんとうなければ、十蔵は「私は千左衛門殿
引廻しで此身に成し、其おんに是金五十兩ろぎんにしんぜる。」

「お心ざしはいたゞきました」包つみながらもどす。四五右衛門は

「身がやるかねが有」と刀を出せば、おくめ取ば。「やい男なれ
ばはら切。女じやのどついてしね。親兄弟共に七生迄かんどうじ
や」とはら立。万之丞十蔵もろ共帰りける。

おくめは刀をさし。「あゝうれしやねがいかなふた。是は
くきつい雪のふりやうじや」と。袖打はらふ。うしろよりはる
の丞。かささしかけるれば、おくめは「雪はふれ共身にかゝらぬ
は。めいよな」と見かへり顔見合。「どなたやらお心ざし忝ない。」
「いや私はかまいませんが。此かさ右衛門がきせます。」「そん
ならかさ右衛門殿くはぶんな。つれ立行ふ」と一へんさし。「も
どします」とかさ渡し行んとすれば。「はおくめつれない。」「名
をしつてござんすはどなたじや。」「身ははるの丞じやそちにほ
れ。親はてつほうがしらかち川くん太夫にもらいかけしに。先や

く有と柳川千左衛門へゑんに付た。其後皆引こし国をのいた。某
におくをもたさふと。去大名の娘と云名付したと聞。身も国をの
いた。此物共は某が跡をしたふてきた。そなたにあふはゑん。殊
に千左衛門は相はてごけじやと有忝ない。ふうふに成てたも。」

「私ゆへ其やうに国迄のかせ給ふ。お心ざし忝ないが。あすもし
らぬ命じや。」「さいぜん聞ばねがいかなふたとの一ごん。しさい
をきかふ。」「然ばお供の衆のけ給へ。」「尤々皆はやどへ帰れ」と
かへせば、おくめ申は。「私つれあい千左衛門相はつる時。ゑゝ
本望とげずしてむねなんと云るゝを聞。わしはこなたの(五三
ウ)女房。女でこそあれ望かなへんと申たれば。然らば命をくれ。
当みだいは姫君のけいば。むこ君もお入なきに。弟兵ごと云を近
日やしきへよび入ると有。兵ごに国やらん為じや。そち命すてゝ
けいばをころせと。ゆいげんし相はて給ふ。お主ころしては。親
一門主ころしのとがはのがれぬ。それゆへいたづらをし。殿より
ついほうおや兄弟のかん当うけたれば我まゝ。やしきへかけ入本
望とげます。」「聞へた恋は思ひ切た。身もやしきへ行見とゞけ
てやらふ。」「まゝ母打。取まかれなば。おまへの手にかけてこ
ろして下され」と。云合やしきをさして行にける。

あんないはしる。おくめはぬき刀でをくへ切入。「やれらうぜ
き物」と侍共取に入を。はるの丞中げん姿に成一々に切ころす。

大殿將げん出「おのれ何物じや。」「中げんでござります。らうぜき物と聞かけ付ました。」「下らうにはういやつじや。身は將げんじや刀をとらす。侍に成手がらをせよ。」「忝い」と両こしさす。所へおくめみだいのくび切。ひつさげぬき刀で出るを。兵ご忠太おっかけ出るを。はるの丞おしへだつ。「おのれ何者じや。」將げんは「身が刀くれて云付た。さあらうぜき物をとらへ。」「畏つた」と刀ぬき打合ば。おくめは「こな様の手にかゝれば本望。ころし給へ」と下にゐれば。みゝへ口よせ。「しゆびはよい立のけ／＼」と云。兵ご聞「一みのやつじや。あねの敵のがさふか」と切付る。はるの丞切合をくへ入。おくめはゆき姫をつれ出。「是はるの丞様云名付の姫君じや。」「扱は殿様か」と取付給へば。「よいきりやうふうふじや。先こゝをのき給へ。」つばねはゆき姫つれ立のく。兵ごは「是將げん殿あねはころさるゝ。こなたをころし（六4オ）此国は身が取」と。あへなく切ふせる所へ。はるの丞かけ付切はらひ。「ゑゝ今少し。おそかつた。某こそ姫と云名付のはるの丞。姫は先へおとしました。敵は某打取」と。おくめもろ共立のき給ふ

中

らうにん民^{たみ}之丞やしきふしんする。さくはん源三かべをぬる。

やねふき源三やねへ上りゐる。左官は。「おれは此かべをぬれはしまじや。其やねに此中かゝつてゐる。いかいへたじや。」「そふ云そちがへたじや。此やねせい出せは一日にふきしまふ。それでは式分ならでとれぬ。此十五日かゝつてゐれば卅分してやる。」「尤じや此かべくづしてぬりなをさふ」と云所へ。女房ひるめし持来り。「源三さん／＼」とよべば。左官「おれじや」とそばへ行ば。「いやちがふた。やねふきの源三さんじや。」「おゝこゝにゐる」といへば。女房およつはしごより上れば。「めしはまだいやじや。」「そんなら酒持てきました」と。ひやうたん出せば「よからふ」と。一つうけてつつとのめば。左官みてけなりがり。「あいしませふか。」女房は「相手が有ばよいげな。あの人にさゝしやんせ。」「あれが名も源三同じ名で相手にならぬ」と云ば。「有やうは作兵へと云。あいせふ」とはしごより上れば。「作兵へなれば親の敵やらぬ」と云ば。きもつぶしとびおり。「のますまいと思ふて。敵とはむごい」ところりとねる。所へおくめ「源三殿／＼。ひるめし持てきたぞや。」「左官が女房には扱も見事」とやねよりおりる。おくめは「人はなしおれが持てきました。」「是は忝ない。」「ゆかりと有て殿様をつれ私方へ御こし。はごくみのためかやうのはたらきいたします」と云。所へ民之丞母よめおきさ諸共出。「さくはん（六4ウ）やねふきせいが出

る。酒のんでやすんでしや。」「是は忝ない」と云所へ。民之丞外より帰り。「是はしごととせぬか。」「あなたから酒が出まして下されます。」「むゝ母様お入なされ」とおくへ入。「是女房おくにござる侍は。母様の主すしじやと有てかくまい給ふ。又次の間の女郎は。身がお主でかくまふた」と云所へ。ゆき姫おくより出給へば。おくめみて「なふお姫様か。殿様と一所にのきました」と云を聞。やねふき源三申は。「私は千左衛門が弟千五郎でござります。此女房はかちうの娘つれのいた。それゆへかんだうをゑ此ていと成し。某やしきを出し跡で。兄が女房よびしゆへ見しり申さぬ。将げん様おはてなされたと有。いぜんの通御奉公申度」と云ば。民之丞聞。「かん当の身と有ばきのどく。ゆき姫様へ申。らうにん物有おかゝへあれ。」「ともかくもそなた次第」と有ば。「是くこなた。もゝの江定右衛門とおなのり有。御奉公はじめに殿をよびて御出なされ。」おくめ聞。「さゝ山の門から五六間め。いけがきの内に殿がござります。」「心へました」と女房もろ共行にける。

母立出「是民之丞。そちがかくまふた女中へはちそうし。おれがお客へかまはぬは聞へぬ」と云所へ。をくより兵ご出れば。姫おくめは袖顔におゝいかくれる。兵ごは「此間はない用有たゆへ。見まい無用と申た民之丞のぶさたでない。扱そなたのかくま

いめされた女中と近付にならふ。それ／＼」と大きかづき取よせ。一はいのんで「女中へさし申」と云ば。民之丞持行。「是あなたのおさかづき」と。ゆき姫へ一つづき。「むかふ成松のゑだぶりごらんなされ」と。兵ごに見せ其顔さかづきへうつせば。(七ノ十五才)ゆき姫みれば。敵兵ごなれはきもつぶし給ふを。民之丞おさへ顔見せず。「女中のきりやうあしいゆへ。あいとむないと有お入なされ下され」と云ば。「はて大事な事を」と。母諸共をくへ入

雪姫おくめは「あれが敵兵ごじや。討してたも」とかけ入を。二人共かきの外へつき出し。「身はらうにんし是に有しゆへ。兵ごとやらのかはは見しらぬ。母がいぜんの主じやと云。名をかくしかくまいめされた。此きる物もかへす」とほり出し。「身は跡月観音参りの道で。らうにんの女房へ一銭のかうりよくと書付其つづれをきてござつた。ふびんなと思ひ持合た七八分の銀をやり。かさの内をみたればお姫様。是はと云て。すぐにはへ御供申た。こなたのつづれきても。心に誠有殿より外に男持給はぬ。其ごとく今おい出すは。よごれた心にみゆれ共。その心は後にしれませふ」と云共。「いや／＼兵ごへ一みし我々おい出す。殿様へ申思ひしらさふ」と。はら立二人は行給ふ。扱民之丞は兵ごをよび出し。「是にごぎつてはお為にならぬ。しばし外へ御こしなされ。」

「然ばあなうの別当方へ参らふ。」「其通書ておいてござりませ。」
「心へた」と書残しかしてへ行。

其跡へはるの丞千五郎。雪姫おくめ来り民之丞を取まはす。
「おゝ御出なされた」と。一こしをおくめにやれば。其まゝ打かく
るを。かいくゞつて打おとし。又刀を姫へ渡せばぬきふり上給ふ
「お主しやお打なされ。」千五郎みて。「命すつるやうすはどうじ
や。」「されば兵ごは母のかくまはれた。其物をうたんとし給は
ゞ。母が長刀ふつて手むかいせば。切ふせ給はん。某母のころさ
るゝを見てゐられふか。それで御兩人もおい出した。」「尤じや
此所でお打なさるゝは少しお待（七ノ十五ウ）なされませ。」民
之丞は「初てのお出。御酒上たけれ共此ば。是に金二両是でとゝ
のへしんぜて下され」とほり出せば。はるの丞取て。つゝみし
紙ひろげみれば。兵ご書たる紙。「扱は敵はあなうへ立のいた
か。」民之丞は「私が心ぎしの御酒じや。ゑはぬように上つて下
されませ。」「おゝくはぶんな」と皆あなうへ打に行給ふ

切

ゆきゑの丞の女房おちよは。いもとお京お吉もろ共いせ参宮。
けらい金右衛門馬かた姿と成。馬かた仁介は侍出立。道中なぐさ
みやどへ帰れば。おちの人おすまお子いだき。平介諸共むかいに

出る。おちよは「皆まめに有た。平介侍に成たか。」「私はざう
り取。今日若様のかみ置。其お供に侍がなうてはと存。上下大小
でお供仕つた」と云ば。「でかしたく。先皆やすめや」と有ば。
金右衛門仁介かしこへ入。

かず右衛門おくより出。「お内義下向なされた。ゆきへ殿急用
で。外へ行其るすを。日比念比なと有て某に頼置れた。若いお内義
と私一所にはゐられぬ。ゆきへ殿帰らるゝ迄は入る事はならぬ」
と。かきの外へ出せば。「是はめいわくなさむふてゐられぬ。」
平介はふとんほり出し。「是酒かんして上ます」と。帯でゆはへ
さげおろせば。「心ぎしうれしい」と一つのみる給ふ。かず右衛
門は。「平介お内義に気が付過るよ。」「こなたは何とやら。私
とおく様とわけも有やうな云ぶん。聞ねばおかぬ」とつめかくれ
ば。「いな事をしらべる覚なくばよいは。そりうつてりよぐはい
物め」と。持たるきせるでたゞけば。「かんにんせぬ」と云を聞
おうばかきの戸あくればおちよかけ入。「不義と有ては（十一
六オ）

挿絵第三図（十一六ウ）

挿絵第四図（十二七オ）

私がきかぬ。「いやそふは申さぬ。平介たんな」と云所へ。ゆ
きへはあみかけしのり物になはせ。侍引ぐしかへれば。かず右衛

門は「是はとが人さふな。おないぎもいせより下向。こなたのるすゆへ内へ入かねた。」おちよ出れば、「身が尋る者あなうにゐると聞。はせ行とらへてきた」と云時。のり物の内よりこゑをかけ。「是かず右衛門殿身は兵でござる。あなうに罷有し。大ぜい来り切むすびし所へ。其ゆきへが身がすそをかい。いましめつれ参つた。身は命有ば一国の大名に成。此ばをのがし給はゞ。命のおや。半国はこなたへつかはさふ頼申ぞ。」かず右衛門笑ひ。「きうし一言といふ。侍に命くれと云ば引はせまい。半国で悪にくみせふかうろたへ物め。」ゆきへは「それおくへ」とのり物入させる。かず右衛門は。「兵ごとはらうにんの時の近付。扱すいたしてめいわくした。今の事ではない」と。はなしによそへ。平介とおちよ不義のていを云。袖より袖へ状を渡せば。ゆきへ心へ請取。かず右衛門は歸りける。所へお京ぜん持出。「のり物の内からひだるいと云ます。」「そふであらふ是くはさふ」と皆をくへ入。

おちよはふろ上りの姿で。「あゝくたびれた」とこけてゐる。お吉は「是ふとんしいた。此上へねやんせ」と。枕びやうぶあんとうを持て入。平介中げん姿そつと来れば。おちよは「人がなくばこゝへおじや」と。ふとんへ上りさゝやく所へ。ゆきへがこゑすれは火ふきけしゐる。ゆきへ手あんどう持出。二人が前に置

ばきもをけし。平介是迄とぬかんとするを。おちよとめる。ゆきへは状をふうじ「是は大事の物そちへあづくる。」筆にすみつけ女房に持し。我顔へすみ付。「此かはそちがよごした。」「紙てぬぐいませふ。」「ぬぐう（十二ウ）たらすみはおちよが。心のよごれはのかぬ。」女房ふう切よんで。「此文ごらんじたらおはら立は尤。あらはれたら一所にしなふと書たは。平介殿は私が兄様じや。」「成程某こそ。汝が打た月岡平太夫がせがれ平介。親の敵やらぬぞ。」女房は「私は是へ奉公に参り。お手かけられ市松をまうけおく様に成。其後平介殿中げん奉公に来り給ふ。みれば私が兄様。ゆきへは親の敵。討にきたと有はつと思ひ。何とぞ無事にすむやうにと。おいせ様へ参りました。」ゆきへ聞。「平太夫せがれとはとつくみて置し。何とやら女房と不義のていに見へる。そこを打ては。敵打を不義にして討たと云れてはゆきへが立ぬに。兄弟としてよい今せうぶせふが。めしうとを一家へ渡さねは国がおさまらぬ。それ迄待まいか」と云所へ。はるの丞ゆき姫来り。「兵ごを御渡し下され。是平介とやら。親平太夫は將げん様が。舟ばのこうろんで御討なされしを。大名の敵有ては国の為にならぬと。ゆきへ様我打たと云ふらし。国をのかせ給ふゆへ敵と有は尤じや。則將げん様其いはくの書置有」とみせ給へば。平介は「扱は左様か。將げん殿は。おはてなさるゝ討敵は

なし。みらいへ行親に申はけせふ」と。はら切んとするをゆきへ
おさへ。「討する敵が有。将げん殿をころしたは兵で。かれを討
てたむけよ。」「尤じやせうふさせて下され。」「兵では我々為に
も兄親の敵。なはといて出さふ。そちも討とめさせ」と。兵で
を引出しなはとき。刀渡し切ふせ。皆本望のとめさす。

所へかず右衛門忠太と相けんにておつかけ来り。ゆきへをうた
んとすれば。「是とうじや。」「おゝ兵ごもそちもころし。一国
を身が取」と云を。かず右衛門忠太を討。国おさまりける

八もんにや八左衛門板(十三八才)

(付記)

- 1 読み易くするために改行し、登場人物のせりふには「」を付した。
- 2 実丁数を算用数字で示した。

解題

巖松万倍緑

国立台湾大学研究図書館蔵

装幀 原表紙・黄色・無地 縦二〇・九糎×横一五・七糎

匡郭 四周单边 縦一九・八糎×横一四・六糎

題簽 原題簽・薄紅(左肩貼付) 縦一六糎×横四・六糎

四周双边(縦一五・四糎×横四・二糎)

(絵)	
い□□□ 松 ま	巖 まん
かほみせ大あたりおどり	万 倍
哥入	みどり 緑
八左衛門	ふ屋町通 八文字屋

副題簽・紅(中央上部貼付) 縦七・八糎×横六・五糎

四周双边(縦七・四糎×横五・九糎)

(紋)	
立役	片山小左衛門
立役	染井半四郎
名	
太夫	山本かもん
座本	沢村長十郎
代	
太夫	山下かめの丞
立役	山村哥左衛門
(紋)	
実恵	宮崎義平太

画像
非公開

表紙

画像 非公開

役人替名付 (三才)

見返

画像 非公開

挿絵第二図（五三才）

挿絵第一図（四二才）

小性源吉御供

おとく万之丞きのどく

大あたり
山中猶十郎

はるの丞とかげに聞いる

いもとおくめ刀うけ取

十藏五十両包出す

兄四五右衛門刀やる

やねふき源三酒のお所

大でけ
百人首

おくめひるめし持来る

女房およつ酒つぐ所

さくはん源三かべぬる

大でけ
玉川

たみの丞母出る

よめおきえ

おさん水ちや屋

どけおくめせんぎする

大あたり
かもん

つばねめいはくがる

おとら水ちや屋姿

こしもとおしな
大でけ
かめの丞

こしもとおきく

ゆきひめやうす聞給る

侍ころされ

はるの丞いげんと成来る

おくめけいばのくひ切出る

大でけ
猶十郎

将げん殿刀やり給る

大でけ
有右衛門

けいばの弟兵ごおつかけ出

忠太左衛門おつかけ出る

画像 非公開

挿絵第四図(十二才)

挿絵第三図(十一才)

おくめ刀で打付し所

源三千五郎と成取まゝ

音羽
大あたり

たみの丞刀たゝきおとす

はるの丞打付んとする

ゆきひめ丞持つめかけ

敵兵ご顔益へうつる

たみの丞女房

音羽
大あたり

たみの丞益へかほうつさず

たみの丞が母

ゆきひめ兵ごかほみる

おくめ袖おゝいるる

かず右衛門おつかける

ゆきへかほくすみつけさず

忠太左衛門おつかけられ来る

おさ川
大あたり

女房おちよめいわく

半大夫
大あたり

平介見付られせく所
半大夫
大あたり

ゆきへ女房おちよ内へ入

ゆきへいもとお京

おちの人すま戸あくる

平介つめかけぎしむ

宗十郎
大でけ

兵ごをあみのり物に入来る

義左衛門大でけ

かず右衛門きせるでたゝく

ゆきへ兵ごをいけ取かへる

おさ川大当り

この副題簽は「役者替名付」に照らしても、別のものが誤って添付されたものと考えられる。管見の限りにおいて、これと同じ座組みのものは、享保六年・京・万太夫座・二の替り『けいせい遠山松』がある。

見返 広告『役者三幅対』『西川ひな形』『好女談合柱』『野傾咲分色存』『武徳鎌倉旧記』

内題 上 巖松万倍縁 いのおのまつまんばいのみどり には男お情の笠 おのほくだんかうぼうし 顔見世大当り

丁数 見返半丁 役人替名付等半丁 本文七丁

行数 十二行

板心 上部に「万ばい」、下部に丁付「三……六、七ノ十、十一

……十三」

挿絵 見聞き二面（四2ウ・五3オ、 十一6ウ・十二7オ）

刊記 本文末に「八もんじや八左衛門板」

上演 表紙に「享保三戌貞見せ」と記した方箋が貼ってあるが、

評判記『役者三幅対』『役者職敵』によれば、享保二年の万太夫座の顔見世であることは明らかである。

作者 佐渡嶋三郎左衛門（「役者替名付」にある）

但し『役者職敵』音羽次郎三郎の条に、「当かほみせの上も此人の腹中より出たる仕組」とある。

本作は、元禄期以来の歌舞伎狂言によくみられるお家騒動狂言である。お家騒動の悪計の発端が継母によってなされ、忠臣の活躍によって秩序が恢復するという、当時の歌舞伎狂言としては一般的な大筋に、親の敵討という副題をないまぜて構成している。

中の巻で、音羽次郎三郎紛するかまど山民之丞が、盃に敵の顔をうつして雪姫にそれとしらせる趣向は大当りであった。本狂言本の挿絵にはその場面をのせ、「音羽大あたり」と記している（第三図）。また、『役者三幅対』『役者職敵』でもこれの特筆し、それぞれこの場面を挿絵にのせている。

（追記）

資料の閲覧に当って、国立台湾大学研究図書館の曹永和氏・呉傳財氏はじめ多くの方々のお世話になりました。付して、深謝の意を表します。

（本学教授）